

# 眞生

第十卷 第二號

## ○本當の人物がない

- 世の中に何が必要かと云へばそれには色々の必要があらう。乍然その中でも本當の人物ほゞ必要なものはない。
- それも世の中が景氣でもよくて、萬事がすらすらと行く時ならばそんなに人物の必要もないが、少くとも今日のやうな、不景氣のつゞく時代には金よりも大切なのは人物である。
- 色々の事業に於て、「今日は金の世の中だ、金なくては何事もできぬ」と多くの人は云ふけれど、今日の世の中は必しも金ばかりで済むものではない。實は金が有り過ぎて反つて困る人もないではない。
- それでは不景氣ではないではないかと云ふ人もあらう。が、金があまり過ぎて動きのとれないで困つてゐる人もある。所謂大きな銀行は金融機關が動かぬので金が有すぎて困つてゐる。
- それではその金を金のない人にやつたらさうか。それともその金で事業でも起して金なくて困つてゐる人でも救つたらよいのであるが、それには人物が必要だ。そんな仕事でも任せられる本當の人物がない。
- 少くとも今日では色々の動き手は可なりに多い。そしてまた動かすべき資金も余つてゐる。乍然それらの人々とそれらの金とを以つて本當の仕事をする人物がない。人にものを頼むにも、人からものを頼まれるにも、今日一番かけてゐるものは人物でないか。（念）

# 大 きい 念 佛

## 目 次

本當の人物がない 念	魁 子
大きい念佛	土屋親道
觀佛と見佛に就て	土屋親道
宗教と經濟	土屋親道
昨今の生活	安田快順
吾朋便り	

「信心々々」といひますが果して「信心」とかいふものが、何處かに在るでせうか。

私はそれが「アル」といふことをハッキリ突き止めました。それでは何處に在るか、それは私の内に在る、ココに在る、ヨソに在るのではなく此の私の衷心に在る。

信心は何處か、よそから輸入して來るものゝように思つたが、そうではない、此の私の裡に在つたのです。在つたといふことを發見してそしてそれに活動を起こさせることが信仰でした。

そして其信心が動き出すと、ものを言ひます、手足を動かせます。

恰度私の手足目鼻一切が、その信心から綱がれてゐて、悉くがその信心から操られて行きます。即ち信仰といふのは私の命令中心といふこととせう、そしてその指導原理で動く私全体といふものをいふのでせう。

今私は、三河の柳塚といふ所へ來て、お念佛を申さして貰つてゐます。爰の方は皆、大變大きいお念佛をなさるから、本當に氣持がいい。

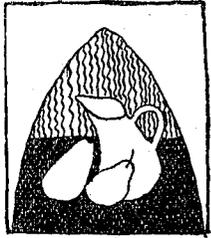
一体同じお念佛に、大きい念佛と小さいお念佛とがあるでせうか、私はそれが有ると思ひます。それぢやその大きいお念佛とは一体どんなのをいふのでせうか。

普通信仰といへば、信仰で煩悶を忘れない、信仰で悩みや苦しみを失くしたい、信仰で金が儲けたい、信仰で靈感が得たいと、色々なものを得たいが爲めにお念佛を申します。而しそんなものは簞笥や手文庫の曳出しを開けるがための鍵のようなもので、手文庫が十あれば鍵も十個要るといふような細かいものであります。

そんな細かいお念佛でなく、大きいお念佛を申さねばなりません。「自分」といふものを全体として信仰に出來上らさして下さるお念佛を申さねばなりません。病氣だとか、失戀だとか、破産だとかいふ一々の問題を解決するためのお念佛でなく、自分といふものが全体として、ハッキリして來、シツカリして來れば、そんな個々の問題は其の時々に、應分の解決が出來て行きます。

枝葉へ肥しをやるのでなく、根元を肥さねばなりません。小さいコセ／＼した小慾のお念佛でなく、自分の土台から固め上げて來る、根本からお念佛で築き上げて來る——お念佛でない、一時或る一つの問題には間に合つてもすぐ次の問題には役に立たぬといふことになります。

さうか私達は、全体として一つの信仰の熟した塊りになりたいと思ひます。(魁子)



## 觀佛と見佛に就て

(愚民氏の唐澤山別時座談會の抜書を見て追記す)

土屋觀道

### 一、觀佛と見佛

觀佛とは佛を觀すると云ふことで、必ずしも見佛と同じではありません。だから淨土宗では觀佛と見佛とは一應區別して居るのであります。乍然このことは同じ宗内でも之を混交するものもあると見えて、弁榮上人の光明主義を見佛主義と云つて觀佛主義と混する人があるのは困つたものです。

此のこゝをかつて私が上人に申し上げましたら、「凡そ見佛には觀佛三昧によつて之を見る法と念佛三昧によつて之を見る法とがある。然に宗祖は觀佛三昧によつて佛を見奉ることは斷念なされたが、念佛三昧によつて佛を見奉ることをまで斷念せられたものではない。それでは宗祖の御歌や三昧發得を何と見るか、弁榮愚なりと雖も宗祖が七百年もの昔己に捨てられたやうな觀佛三昧を以つて、今時佛を見やうとするのではない」と申されたことがあります。宗門の中でも此のことを知らないでやたらに批難する人があるのであります。

それも、一般多くの信者にはそんなこともありませんが、反つて少く昔からの淨土宗の學問でもした人の方にさうした誤解が多いのであつて、實はそれの爲めに光明主義は異安心だなど云つて攻撃されたこともありました。然しそれは多くの場合見佛と觀佛との相違を知らない人の考へから出だ

誤りであつたのであります。一犬虛に吠えて万犬實を傳ふと云ふことがあるが、全く此のことでありませう。それから云ふものは多くの淨土宗の人たちが光明主義は見佛を主張する、だからそれは異安心であるとかう云ふのです。ところが若しも見佛と云ふことが異安心であるならば第一法然上人がら異安心と云はねばなりません。何となれば宗祖法然上人が六十六の御歳には見佛をせられたと云ふからであります。さうしてまた、我が淨土宗では二祖も三祖もよく念佛せられたのであります。何れも見佛を以つて異安心などは寸毫も申してゐられないのであります。否それどころか特に別時念佛では「何事も思はで念佛申すはあしきなり、佛を見たてまつらんこと所期なれ」と其の見佛をすゝめて居られるのであります。然に觀佛の方は法然上人の御言葉では之を自分には不可能であると捨てられ「自分もかつてはさう云ふいたづらことをしたこともあるが今は全くそれをやらない」と云つて居られるのであります。然に見佛と云ふことについては六十六才にして之を成就せられ、御臨終のときにも「われ佛を見奉ること久し」と云ふことがあります。又かつて御歌の中にも「われはたゞ佛にいつかあはひ草心のつまにかけぬ日ぞなき」と詠じられてゐる位だから見佛を否定遊ばされるわけはないのであります。

然ば何が故に見佛は之を求められ、觀佛は之を捨てられたか、それは必ずしも觀佛が悪いからではないのであります。觀佛とは觀佛三昧のことで佛の境地を自分の力で觀念するので、到底普通の凡夫の力では不可能であるからであります。之に反して見佛の方は念佛三昧の成就の結果として佛を見奉ることが出来るのであつて、之は如來の願力によつて拜むことができるからであります。此のことは觀無量壽經について、支那の善導大師が此の經を觀佛三昧爲宗、念佛三昧爲宗と二つに分つて説かれて居るのを見ても判るのであります。前者は十三觀法と云つて、全く自力の觀法に屬し後者は念佛三昧であつて、他力の故に佛を見奉ることができ得ると云ふのであります。

乍然光明主義の一派の中にも、近頃ともすれば此の見佛三昧を忘れて、觀佛三昧のやうなことをする人のあるのは困つたものです。佛を拜みたいと思ふのはよいが、それが拜めぬと云ふので悲しんだり、時には催眠術見たやうな仕方によつて佛を見せやうとするが如きは全く如來の本願を忘れたやり方でありませう。私自身としても可なりさうした傾向に深く入りこんだ時代もありましたから、此のことは特に皆様にも御注意をいたす次第であります。

## 一、見佛の實体

それにしても見佛とは何を云ふか、たゞい畫像や木像に等しいやうな佛を見たからと云つて、それが果して本當の見佛かどうかは大なる疑問であります。何となればそんな見佛ならばいくらでも催眠術や自己暗示を以つて之を見ることが出来るからであります。さうしてまた幾多の實例に調べてもさうした幻影を以つて、本佛と思ひ違えてゐた人の事實があるからであります。さう云へば「たゞいそれが幻影にも本人にとつて本佛と思へ、又それが眞に有難いならば結構でないか」と云ふ人もあります。乍然まことに道を求むるものならばそんなことでは決して満足するものではありません。それは反つて本當の道を求むる上に於て、大なる妨げとこそなれ。決して自ら讚みすべきものではありません。何となれば眞の佛道は決してそんなものでは無いからであります。

然に或る人は少しの念佛で「やれ佛を見た」の「光を見たのといかにも自分獨りに本當の信仰にもはいいり、餘程の深い体験でも持つてゐるかのやうに自らを高くする人があります、乍然之等の人は未だ眞實の佛教が何たるかも知らず、いたづらに一種の見なれぬ幻影に自ら驚き自ら迷ふてゐるのにすぎぬのでありまして、決して本當の信仰ではないのであります。

中には自ら見たと云ふ佛を紙に寫し「之々の佛を見たが本當のものでせうか」とわざ／＼私の所へ

尋ねてよこした人さへもあります。之はまた考へやうによつては自分の信するその人に其の是非を判定して貰はうと云ふ正直さは何よりも結構であります。人に尋ねて見ねばならぬと云ふだけ、そこにそれだけの不安と不確實さがあると云ふことは確かでありませう。従つて斯くの如き見佛が決して自分を本當に満足せしめ得ないことも事實であるが、さうした見佛が本當の見佛でないこともまた事實でありませう。

加之、法然上人の信仰は必ずしも見佛を以つて目的としたものではなく、見佛は念佛の結果少くとも臨終の夕には誰れでもが拜み得ることであつて、それは如來の本願力によるのであるから、何もその爲めに念佛を勵まねばならぬ要もないのであります。従つて念佛の目的は淨土往生にあつて、往生淨土こそ念佛の目的であつたのであります。

「然ば何の爲めに別時念佛をつとむるか、少くとも別時こそは見佛を目的とするのではないか」と。或は云ふ人があるかも知れませぬ。乍然それも今日の私には可なりの相違を持つて居ります。別時は修養の場道である。平生の念佛こそ私共には最も大切であるけれども、それは愚かにして相續せぬことが多いため、ともすれば多くの世事に捕はれて念佛を怠ることが多いのであります。従つて其の爲めにいつしか念佛もおろそかになり、心から如來の大慈に打ちひたれることも少なくなる。故に、時々別時を行じて此の心を深めよと云ふ法然上人の御別時であります。だから本當の別時の目的は寧ろ別時そのものにあるにあらずして全く平生の念佛修養の爲めにあると云ふべきであります。

## 三、別時の意義

だから別時の目的は必ずしも長いのを以つてよしとせず、常に日常生活に於て念佛の力にて眞實の

活動のできるのを以つて最も良しとするのであります。平生とは業務を持つた生活を云ふ。だから如來に合掌して、その中から全身を業務生活の爲めに献ぐることをできるのを私共の理想とするのであります。その外に別時念佛の意義はない。一生念佛して山に入るが如きは寧ろ此の世の害虫であります。

それに淨土宗の念佛は必ずしも散心と定心とを問はぬのであります。理窟から云へば散心の念佛より定心の念佛が有難いやうにも感じますが、如來の大悲に望むれば散心と定心とを問ふものではありません。否それどころか散心の中からも念佛するものは自ら救はると云ふところに本願の尊いところもありまして、そこにこそ凡夫の救はるゝ大なる理由もあるものであります。否それどころか今日のやうな社會生活に急かしい時代に於ては寧ろそれでなくては助からぬのが本當ではなからうか、それにつけては今や念佛も必ずしも私共の要とするところではないのであります。

若しも念佛を要とするならば私共が如來の大悲に感じて之に南無するとき、それが即ち已に見佛と云つてもよいのであります。何となれば已にそれだけ佛に南無し得たことはそれだけ佛を信じ得たことであり、佛を信じ得たと云ふことはそれだけ佛が信せられたと云ふことであり、其の信じられた佛と云ふものはそれだけ佛を見た証據であるとも言へるからであります。而して此のことは決して私が勝手に理窟をつけるのではなくして、能信所信不二なれば能信の上の所信の佛は其の念佛が本願の念佛である限り、決して單なる畫像木像の佛や、幻影の佛ではないからであります。否それこそは正しく私共が全身を投じて合掌した眞實の佛に相違ないのであります。而て此の佛こそは未だすがたこそ見ざれ常に私をつゝみ私を導いて彼岸の淨土にまで私を離れ給はぬ宇宙の大ミオヤそのものであるのであります。従つて、さうした御佛はもう御姿を見なければ信せられぬやうな佛でもなければ佛見え給えなごゝ殊更に御願せねばならぬやうな佛でもなく、私共の生活はその佛の中に自己の理想を實現

して行くのみであります。

#### 四、念佛の目的

然ば私共の念佛は何の爲めの念佛であるか。それはたゞ淨土往生の爲めの念佛であります。言かへれば二祖の所謂不離佛值遇佛と云つてもよい。念佛するところに佛と離す、佛と離れぬところに本常の私共の働きもあるからであります。散心の有無は時と場合とによるのであつて、定心をましまするも必ずしもそれに捕はれる必要はないのであります。

従つて朝夕の念佛、若くは七日五日の御別時は所謂修養の爲めの念佛であつて、如來の靈化を蒙むる爲の念佛であります。如來の靈化を蒙むれば自ら信仰の増進もあり、信仰増進の結果としては進んで見佛の域にも達せられ、自分の人格の向上もそこに開けて、此の世から應分の社會的活動もできるからであります。

乍然畫像や木像の佛でさへ、其の中に現はれ給ふ如來の靈格は之を人格的に拜することを得て有難いものでありますから、まして如來の靈光を釋尊の如き人格として私共の心眼に拜することは決してどがむべきことではありません。此の意味に於て私の心の上に生きて在します如來の御光は大きな一つの力であります。其の他、釋迦孔子クリストの如き偉大なる人格の姿や法然親鸞の如き宗教の偉人を自分の心の上に思い浮ぶことは又何よりの樂しみでありませう。まして、大無量壽經や法華經等に現はれ給ふ如來の御光を莊嚴極りなき宇宙の大生命として拜し奉るとき、私共の心は上なく輝きに充たさるゝのを覺ゆるのであります。

一、佛教より見たる經濟

こゝに題して佛教より見たる宗教と經濟と云ふ、之は主として今日の社會經濟問題を佛教より見ていかに考へるかを述べて見たのであります。而もそれは今日のやうに社會問題が主として經濟問題に集中せられ、政治も思想も悉く經濟を中心として論ぜられる今日、之を佛教徒の立場よりいかに見るかと云ふことも亦必ずしも無用ではないと思ふたからであります。

従つて私のこゝに述べんとするものは第一に佛教から見た經濟への考へを以つて更らに今日の經濟問題をいかに解決すべきかを説いて見たいのであります。

然し佛教の第一義は人類の自覺であり、迷盲よりの覺醒であり、束縛よりの解脱であることは云ふまでもありません。従つて佛教より見たる經濟への批判は人類生活への向上より外にはないのであります。従て佛教よりの經濟は經濟の爲めの經濟にあらず、人類の爲めの經濟であることはもとよりであります。人間が生きて行くと云ふ限りに於ていかなる時代にも衣食なくして行けるもの

ではありません。従て人類の文化が進むにつれて、其の必要も亦一層にはけしくなつて来ると思ふのであります。此の意味に於て佛教が印度に起つて以來、二千五百年あまり經濟問題については口ばしを入れぬやうでありましたが、それにしても經濟問題を全く無くして佛教が傳つて來たのではありません。否、それどころか佛教の教ゆるところ、それがいかに經濟問題に大きな關係を持つかと云ふことは少しく佛教史を研究したものとよく知るのでありませう。

たゞ佛教がともすれば經濟を全く無視するかに見えるのはその教へが人生問題の解決にあつて、經濟問題がその中心でないからのことでありませう。

尤も、嚴密な意味に於て佛教と經濟と云ふことが云へるかさうか、昔の財物に關する考へが今日の財物に關する考へと多少趣きを異にするところもあり、又昔の社會状態と今日の社會状態とが大いに異なる限り、昔のまゝの佛教の考へを以つて直に之を今日の考へに應用することができるかさうか。まして昔の佛教々團の中に行はれ

た經濟的考へを以つて而も今日の實際社會生活にそのまゝ持つて來る云ふことは更に一層の困難であることは私もよく承知して居るのであります。

乍然釋尊の佛教が人間を本位として經濟を本位とせず、ここまで人間中心の社會文化を主願として立てたのである限り、其の主願の立場より今日の經濟をさう見ると云ふことは今日のやうに物質中心の經濟問題で全く行き道のなくなつた時代には或は必ずしも無用なことではないかも知れません。

二、佛教々團の生活

然ば、佛教では此の經濟をさう扱つて來たのであらうか。それはたゞ人間生活としての必要な程度に於て之を認めて來たと云へば足りるのであります。それ以上を佛教では求むることを許さなかつたのであります。殊にそのことは僧團生活に於て嚴密に保持せられたことであつて、一切の衣食財物はたゞ其の日の生活を維持すれば足るのであります。それは教團が偏へに佛道修行の教團であつて、其の外に何物をも求めないと云ふのが其の主意である爲めもありますが、佛教が物慾を離れてこの世を超越しやうとしたことは事實であります。従て、僧團

では衣食の範圍はたゞ身命を維持すれば足るのを以つて限度とし、それ以上を求むることは寧ろ罪惡として之を退げたのであります。衣は寒暑を凌ぎ裸体を蓋ふの程度とし、其の衣は人の捨てたものでも拾つて之を洗つて着ると云ふほゞであり、食はその日その日を毎日行乞によつて之を得ると云ふ風でした。而も各人が各地に行乞して得たものは之を持ち歸つて一堂に集め、それを一緒に分けて頂くと云ふ定りでありました。

言かへれば佛教の財に對する觀念は全く無所有の態度であります。財を有せぬと云ふ點から云へば好んで無産者の態度に出で、自ら無所有の態度にあるのを以つて自ら正としたのであります。

然ばそれらの財物をいかに始末したかと云へば例令米一粒と雖も之を粗末にすることを許さず、必ず之を有意義に役立たしむるを以つて其の本分としたのであります。之は財に關する考へが所謂佛物としての考へであつて、之を私有とせず、之を天下の公物として粗末にしないと云ふことを意味するのであります。従つて此の考へは佛教僧團以外の在家の信者の上にも及ぶことは勿論であります。在家の財物の所有や生産事業に對する考へや、或は消費問題に關する考へがいかにあつたかと云ふことは必ずしも僧團生活を以つては之を律するものでは

無つたのでありました。乍然それにしても、財物の爲めの人生でないことや、財物の所有が前世の福徳の果報によると云ふが如き、或は之を施物として社會有用の資に献げることの尊いことを説いたことは昔も今も變らないのであります。

### 三、今日の資本主義

さて、話は少々轉するが、今日の社會が全く不景氣の爲めに行き詰つてゐることは皆人の認むるところでありませう。そして其の原因が殆ど生産過剰から來てゐることも亦争はれぬ事實であります。到る處に就職難、失業難が横はり、延いてはその爲めに起る生活難、思想難は非常な勢いを以つて進みつゝあるのであります。

一面此のことは異常なる人口の増殖と機械文明の發達とが相待つて、就職難、失業難を來すものであります。乍然今日の不景氣は上下を通じての世界的不景氣であつて、労働者も資本家も、地主も小作も、商工業者も一切が共に苦んでゐる今日であります。尤も之を昨春あたりに比ぶれば今春の如きはやゝ景氣恢復の感じもしないではないのであります。それは政府の失業對策などによる人爲的方策の然らしむるところであつて、必ずしもそれが永遠につゞくものかは、更に大なる疑問であります。

ます。何となれば未だ世界の大勢は寸毫も景氣回復の微光だに見せぬからであります。

而も一方には亦農民の生活が逼迫してゐるのであります。而てその原因はやつぱり作物の生産過剰と云います。昔でいへば豊年だがそれが今では反つて不景氣の原因だと云ふのです。世の中にこんな馬鹿な出來ごとが又こありませう。私達の昔の考へでは全く考へも及ばない時代の變化であります。「米がとれぬ作物が出來ない、だから本年は凶年だ農家が困る」と云ふことなら承知も行くが豊作だから農家が困る」と云ふことは全く私共の考へにも及ばないことでありました。若もさうなら、之からの農民は働かないに限ると云ふことになりはしないか、働きさへせなければ穀物ができずると云ふこともあるまい、又高い肥料代まで出して肥なごかける必要もないことになる。其の他農科大學だの、農業學校だの立て、農事改良なごする必要もないことになるのではないか。

然に其の事實、農家の困窮はやつぱり農産物の過剰にある。而てその過剰は主として農作の爲めだと云ふ、作物があまりとれすぎて農民が困ると云ふ、全く今までにない現象と云はねばならぬ。それは豊作の爲めに米價が下落し、その爲めに借りてかけた肥料代や手間代もな

いと云ふ、其の他養蠶家の行き詰りもやつぱり生糸の生産過剰でないか。

然らば農家ならざる工業方面の不景氣は何によるか、之も亦あまりに生産が出來すぎた爲めだと云ふ。品物はできて買手がなくては仕様がなからであります。そこでこちらの方面でも不景氣はやつぱり生産過剰にあると云はねばならぬ。其の結果は物價の下落となり、物價の下落は其れに要した生産費さへないと云ふので所謂工業

家の大損失となるのであります。

其の結果は單に工業家のみではない。大中小の商業家も亦その影響を蒙らざるを得ないので。つまり高價なものを入れたてゐたが物價が下落した爲めにそれに對する損害と而も之から仕入れてもそれが此の先きあまりに賣れないと云ふことは更に入費倒れでやりきれぬと云ふことになるのであります。(一九三二、一、三)

## 昨今の生活(二)

安田 恢 順

### 四、悲しみの上の喜び

私はこの悲しみと喜びとを述べんとするに先立ち、まず私の現在實行して居る事實をお話し申さねばなりません、私の現在、町内のある一部を貫通して居る細き流れがあります、その處が二十年來掃除もせず、塵垢の捨て場同然になつて居て殆ど何等の用もなさぬ様になつて居るのであります。それだから夏期に到れば、其の湧きかへる悪臭氣の強さ、その見悪くさ、而も一朝火災でも起りし場合に一寸の用も立たない、有つても無きが如き

有様、寧ろ有るが爲めに害となる様な處になつて居る故私は其の垢泥を除き、清淨な流れとし、一方その垢泥を利用して、一方の不用の池沼を埋め立て、幾多の活かすべき土地たらんものをこそその作業を起しつゝあるのではありません、悲喜の事實と申すは、その作業に取りかゝらんとする最初でありました、元より私の今日あるは、從來の所謂役者のやうなデモ式の坊主を止め、この法衣を脱ぎて作業衣一枚となる再度の出家身分を志したのであります。處がその私が實際に於て何んと云ふ我慢もので而も馬鹿者で有つたと云ふことに氣がついたのであります。

す。

私はその作業をなすべく立つたのに、正に作業をなすに當つて、他の多くの人達にその作業を見らるゝのが何んだか辱かしいやうな、又何んと人より云はるゝのが恥のやうに思はれ、何うしても晝間實行することが出来ないものであります、それでもその業をなしたいのであるから、實は人の寢静まるのを待つて此の小宅を出で、夜の仕事をするのであります、誠に辱すべきことではあります、そのやうに仕事をすると云ふても、夜中のことでもあり、一方何にか他のものでも盗むかのやうに密かに音も立てずに、靜かにくゝなして居たのであります、そのことが一夜二夜三夜、然しそんなこゝで元より業の成就は出来ないのは當然である、それにも拘はらず私はそんなことに氣付かずに、慥れ盲目的行動をしたのであります。思へば今迄の姿と今の此の姿、昨日迄の仕事と今のこの仕事、云はゞ世間で云ふ最下等のものゝする仕事であるのを、自分が今爲すのであると云ふやうに、心の裡に恥かしく思ふたのであります、即ち仕事をなしつゝも、その仕事そのものゝ尊ぶとさに氣が付かず單に形の上のみ捕はれて、只々人の譽とか、褒貶と云ふものにヲモネリ、明るき行爲が出来なかつたのであります、私は此時であります、私自身を反省したのであ

一二

りました、此の一切に對し誤まりし行動その儘が、過去より今日に到るまで、慣れに慣れたる惡習慣の結實である、單に人にのみ對する名聞心に捕はれて居たのである、あゝ私は自分丈けが眞に生きて居ると思ふて居たのだ。此のサモンヒ心が、心の底にあつたことを知らなんだ。思へば思ふ程、見へに捕はれ、名に捕はれて居たのである、實際に生きんとしても死んで居た、罪惡生死の凡夫とは私自身のことである、僧であるとか、佛子であるとかと思ひもし、言ひもしたが、それは皆悉く自身を裏切つたものであつた、皆私は私の一切を裏切られたのであります。私は泣いてくゝ泣き明かしたのであります。落ちし涙が膝をシットリとしたことも知らずに泣いた、それは三夜目の八ツ時を告ぐる鷄鳴の頃、私の知人が私の作業場へと進んで來たので、私は何んだか恐ろしいものにも出遇ふたやうに、又先にも云ふた恥かしい心であるから、その儘何んとも言ふに言はれず、逃げるやうにして、ウス暗き中を自轉車に飛び乗つて、此の小宅へと逃げ歸つて、不知不識佛前に座り込んだ時の感想であります、何んと云ふ鄙劣なこゝよ!!

心狀、とても筆紙の盡せぬ處であります。皆様!! 此のこと此の心、あらん限り笑つて下さい。何時までもアザケツて下さい、私はそのことを喜びます。

皆様は此の私をして、今日まで光明會の一人であるとか、友としての一人であるかのやうに思つて下された方もありません、然し私より言はしむれば、それは眞の友ではなかつたのであります。暗中飛躍の大賊である、鬼であつた私であります、只皆様はこんな私を殊勝らしい人と見誤られたのである。否、私が皆様に殊勝らしく見せかけ誤間化して居たのであります。私は皆様を此の法衣と云ふ美しい着物に依つて誤間化したのであります。一切の罪を隠し、一切の咎を偽はつたのであります。この一切を誤間化するのが狐狸であると云ふなれば、それは私のことである。私はそのまゝ畜生と云はんか、畜生はそれ自体が、なすべきことを爲すのであるが、この私ばかりにも人間であるのに關はらず、而も人を導く僧たる役目であり乍ら、況んやデモ坊主は嫌ひである。眞生の一人たらんと立ちたるこの私であり乍ら何んぞ云ふ穢らはしい私でありませう。誠にくゝ見利の下にあくことを知らない餓鬼とはこの私のことであります。この時私は私のことを他人のやうに思はれたのであります。餓鬼より一步深き地獄の鬼であると、否獅子身中の虫の様

に、光明會中の一大殺鬼で有つたことに氣付き、それ丈け現在を惡むのであります、皆様!! 笑へば笑つて下さい、驚く人は驚きの儘、喚る人は此の私へ強き鞭をあて下さい。罵つて下さい。

私はこの大なる悲劇の中に、最も苦しい感境の中に、如來の御名のもとに合掌の私を見出したのであります。それは永遠の壽にて在まし、現在無限の光に輝きます如來であつた。而してその御佛にうなづかざるを得なかつた私であります。

私はその時も思ひのまゝに慚愧煩惱の心より、泣いてくゝ泣きくずれたのであります、おゝ其の時なる哉、忽然として、この惱みに悶へる私の小さき心に、悲境のドン底に沈める私の心の前に!! 誓願成就現在説法の報身の御佛はいと莊嚴に!! 大悲の御心に満ちくゝまして、靜寂として立ちますのを拜したのであります。而して空中の讚言と云はんか、「汝のなすべき業は、我が爲すべき活動である。毀譽褒貶は皆我れに結縁のものである、汝何んぞ躊躇する哉」との御指示であつた、この心景は言語の離れた眞況であります、このことに何んで私は泣かずに居られやうか、思へば一昨年の六月號にも一寸書いたことがある「念佛衆生攝取不捨、我れ如是にして汝を守護す」との時のやうに、私は私を知らず、只々

如來の尊嚴、余りに朗らかに、余りに美しくさに、花に見とれる心地して、然もやたらにムセビ泣きに泣いたのであります。この歡喜と法悦とにムセブの時、明星は東天に高く輝き、この私を笑み給ふが如く又讚嘆し給ふがやうにキラ／＼と光るのであつた。私は此の時、眞に心の中から勇み立ちました。而して切りに歡びの中に念佛精進をつゞけました。

その精神の相は、只私獨りの心境であります。いざや行かん、いざ行かう、誠に可愛い子供の手を取る母のやうに、有難く尊び哉、私はすっかり生れ變つたやうな心持ちがした。そして早速朝餉をとつて、いそ／＼としてスコップ取つて仕事場へと走つた。そして成すべき仕事をいそ／＼以て進行したのであります。時まさに五月廿五日、思へば宗祖御遷化の御日柄であつた、以來こゝに七ヶ月、御蔭を以て念佛裡に心の行くがまゝに、この作業に精進さして頂ひて居るのであります。

### 五、第二の悲、喜

其は私のこの小事業にかゝる第一期事業の完成せられた時、當町の警察署長さんより、賞與の意味にてか、志と書きて金一封を惠與せられた時の事實であります。それも初めより話さねば解りませんから申しますが、最初

ふと承はる。今も又眞實なるものは如はある哉と獨言したのであります。それより數日を経て私は署長さんに第一期の仕事として、その道路上の泥土を取り除かんことを話したのであります。署長さんは悦ばれて早速許可されたのであります。それ故私は早々その取り除き事業にかゝつたのであります。然るにこの不具者の身としては、二三月も要するかと思ひつゝ、作業をやつて居たのであります。十數日を経過せし時、不思議にも少年赤十字團の七八名ものが來て、恰かも小菩薩のようになつて、私の作業を助けてくれました。而して僅々前後二十三日目に全部取り除かれたのであります。

其時の捨土は今七坪半の畑地となり、今も野菜が生々として出來て居るのであります。此の第一期の作業が片付きし時、署長さんより前記の通り頂いたのであります。私の心の悲喜とは此時の後であります。

元より私の此の作業に付ては、知友の二三の人は反對もしたのであつたが、前述の第一悲喜の感激に依つて成しつゝ有つた私は、この署長さんより惠與ありしことを知友に喜こんで貰ふと思ひて話したのであります。聞ける人はそれは善きことで有つたか、或人は又中心より喜んでくれたものもあつたのであります。

その時に私は心密かに考へ視し時、此の惠與の志のこ

この不肖な私が愈々明後日、先述の作業を開始せんとする朝まだきでありました、町の火の見半鐘がケダ、マンク鳴るのであります。そは消防夫非常召集の音であつた、私は何事をするのであるかと思ふて居つたのであります。丁度その晝頃になつて、私の實兄が不意に訪ずれ、マエ（私のこと）の成さんと望みし所を、消防夫が澤山出で垢泥の溝を掃除して居るとのことであつた。

それを聞て私は沈黙然として、我が願既に成就せりと靜かに伏し拜んだのであります。その翌日になつて、私は寺へ入浴に行かんとして町を通れば、不用な溝の中に穢泥が澤山投げ入れられて居る、又一方には道路上の二ヶ處までに同じ泥土が約三坪余りもウズ高く積まれて居るのであります。そは一時的に、先述の穢處に埋もれる垢物の上部受けを取り去られたものであつた。それを見て私は人知れず涙をヌグツタのであります。往昔法藏薩埵が、世自在王佛の御前に於て發願の時、「諸天は來つて、薩埵の發願必ず成就に到るのキザンとして、天に妙華を降らしたとある、その時薩埵は一意専心、早く大海の如意寶珠を獲て、諸民を救はんものをと、先づ大海の水を蛤貝もて、汲み初めませし時、諸天神等その業を讚嘆し、各々力を盡して御手助けをなし、旬日ならずして寶珠を得給ひ、あまねく庶民に惠み歡喜を得せしめ給

とを知友に話せしは、そは一大橋慢の心に捕はれて有つたと云ふことに反省されたのであります。この反省は私としては通途の反省ではなかつたのであります。實に一大痛棒として、私の全身を粉砕せられたやうな感がありました。私はその頃、惠心僧都の地獄極樂の真相に付て、事業のまに／＼雨天を利用して、喜んで研究して居たのであります。それでその真相と云はんか、地獄極樂の講相がそのまゝ私現在の實相であることに氣付きて深く興味を以て再三繰り返し研究にふけつたのであります。その中僧都の歷傳を讀む中に、次の様な處に目を止めたのであります。そは僧都が宮中に於て、始めて稱贊淨土經を講演せられし時、天皇を聞こし召され、御感伏の余り、御賞詞と共に白絹一封を御下賜あらせられた、その時僧都は喜びの余り、僧中特に三千の大衆に選拔せられたる光榮を得しこと、誠に陛下よりのこの光榮、さぞかし亡き父上の靈に答ふるはこの事なり、又この恩賜の白絹を送りて、老ひめす母に喜んで頂こうとして使をもて老母の許へ差し出されたのであつた。處が僧都の母は封中の手紙を見られ、御下賜の品を戴くと共に涙慘然として、又一文を奉て、御下賜の白絹と共に比叡の山なる僧都の許へ返されたので有つた。其の文章は、僧都が我知らず、橋慢心に落ち込んで、恰も地獄の鬼を

見るやうである、有難き恩賜の品は鬼の所有となつたのである、母は鬼の與ふる物は着る由がない」との強き諫言であつた。僧都はこの章を讀まれて大いに慚愧煩惱の心を起し、悲泣の余り、立ち處に今日迄のこと、一切の形式の法務を捨て、居を横川に移して、専心念佛の研

究にいそしみ給ひしと」その御研贄の花が此の往生要集の地獄極樂の壽相であると云ふ所に私も氣付かされたのであつたと共に、この一文を見し私は、そゞろ感慨無量の涙を包み切れ得なかつたのであります。私はこの儘僧都の煩惱の心に必的したからであつた。

### 吾朋便り

土屋親道 東京より

只今は午前〇時二十分、丁度眞生會を終つて机についたところでありました。道友の熱心に喜びに満されたところでありました。二三の有志は早くから集つて、東京でも眞生同盟の規約を作つて、少しく積極的に出やうと云ふ相談もなりました、さうして之を各地へも計りたいとの事でありました。

先月の四日の集りは主として佐藤助治氏御夫婦の此の上もない努力によつて新年福引などの催しもあり四十五名の集りも盡から夜にかけての賑いでしたが、之亦道友の限りない喜びでした。道友の睦みがかうしたところまで進んで行くこと

は限りない喜びであります。次に代議士原吉郎氏は其の後も健全、日夜慈光裡に議會を通じて國務に讚興しの活動であります、それこそ眞生道友の先覺として私共の崇敬するところでありました。

尙幸に私共の一家にも一同無事他事乍ら御安神を願上ます。實は近々に今一人家族が新に出来ることになつて居ります、未だ男か女か未定のところにあります。先方では已に決定済みでありませうが目の見えぬ悲しき、それは生れて見れば判らないことになつて居ります。

次に序で乍ら先月の各地巡教の模様を一寸書て置きませう。一月の十一日から三日間は伊勢の大岩での三昧會でした。數年前からの催してもありましたが集る

ものは三四十名でありました。其の道友の熱心さ純信さにはさすがに私も泣かれました。正月早々から之位嬉しいこと又有難いことばかりありませんでした。之は主として谷口氏一家の御盡方によること乍ら、此の道友のおかげかと思ひます。それにしても正月早々からの三昧會、やつぱり御念佛はよいなあさつくづく味はせられました。遠方からは焼津、斐掛、津島、四日市、津、松坂等からの人もありました。

さう云へば今年には岐阜縣の行基寺でも三四の有志が集つて正月の二日から七日間の三昧會があつたこと云ふことです。東京から神谷氏、名古屋から伊藤氏、大垣から淺野氏、岐阜から古賀氏、斐掛から長源寺の奥方などが見えられたこと云ふこ

とでした。之も亦結構なことでありました由。

十四日は午後和歌山の集りでした。盡まで先方に着ればならぬので、早朝大石を立ちました。今度參宮急行線ができましたのでそれによりました。和歌山では晝の間は五六の寺院方と打ちくつろいで相談會でありましたが、今後の寺院生活をいかにすべきかと云ふ事を社会的に考へました。殊に眞生運動に對する寺院方の了解を得たこと云ふことは此の上もない喜びでした。夜は一般の集りでした、大阪からは神谷學周師の來援を得たのです。

十五日は尼ヶ崎、十六日は大阪豊田様集る人々は道友のみでありましたが今年は今一倍の力を入れやうと望みに充ちた會合でした。十七日は神戸に豫定してあつたのが案内を落したのでだめになり、其の代り之を芦屋の藤村氏と伊勢の阿部様方へ振り向けることのできたのは思はぬ恩寵でした。神戸にはすまなかつたが思ひ返せば之も亦喜びの一であります。十八日は四日市の眞生製陶所でした。

主として工場の人々と語るのですが勞資協調の道友は全く眞生主義の工場です。此の世間の不景氣にも、ばかりは不景氣がありません。

十九日は朝の中佐屋の黒宮氏を訪問し夕方は岐阜での集りでした。之は古賀氏の骨折りでした。市の主催としての工業會議所での講演でした。宗教と經濟と題しての話でしたが時節柄多くの共鳴者を得たやうでした。講演の後座談會に移り二十三名は更に一時も居残りしました。市會議員の赤堀氏の如き夜の三時までも語られました。岐阜の町にも一層光がさすやうです。大垣からは、淺野先生がわざわざ御來援を頂きました。

二十日と二十一日とは名古屋の集りです。例年の恒例により二十日は午後から福引二十一日は全くの念佛です。近頃の名古屋の道友は何となく若返つたやうの勢いです。婦人幹部の働きは云ふまでもないのであります、今年には男子でも愈々馬力をかけてゐるやうです。之も眞生の光りかと思へば私の喜びは限りない極みです。此の日の集りには半田、聖母、

佐屋、四日市、津島、岐阜の外行基寺の上人と斐掛の長源寺様なども見えまして非常な氣勢を挙げました。

二十二日は早朝名古屋を立つて、静岡に行き、晝の間は法月氏と粟生様を訪問しました。此の地にも此の四月頃別時會をつとめたこと事でした。うまく行けばよいが今から念じてゐます。夜は焼津の集りでした。幹部丈ではありましたが新年の事だからと云ふので夕食を共にカルピスでの乾盃には一同がはじやぎました。かうした集りにも無邪氣ささくつろぎさが漲つて居ります。夜の座談には三四十名の集りでした。

學寮に歸つたのは二十三日の早朝でした。汽車は夜行にしたのです。夜の旅は非常につかれること云ふことを知つて居りながらそれでも夜で歸るのはやつぱりうちが戀しいのでせうか妻をもてる夫の心を持てる親の心でなくては味はへない心であります。妻や子におぼれる心ではないけれど、用をすませて親と夫がその家に歸るのは何と無理ではありません。永い傳道の旅につかれて其のつとめを果

し、かうして我家に歸る眞生の喜びは其の道に立たないでほ到底判らない一つの恩寵であります。妻もなく子なき一人にも限りなき如來の恩寵は又別にありませうか、妻あり子ある私の此の身にも亦かうして家に歸る喜びのあることを其の道の人に語つておきたいのであります。おなつかしき私の道友よ、遂に私は皆様

のなつかしきにかうしたことを書きました。それはこんなことまで書くほどに皆様をおしたいしてゐるからの事でありませう。願くは此の心を以つて共に勵みませう。ではさようなら、もう夜も一時半を過ぎましたおやすみなさい。

(一九三二、二、五)

眞生誌代寄贈芳名

- 壹圓宛 神奈川奥津寄治郎様、柏崎服部トモ様、全後藤茂次郎様、全卷淵藤吉様、全山田健治様、新潟縣山賀實三様、全小林敬一様、堺市宗宅寺様、東京野澤伸子様、全小野勇様、全山田ハナ様、全藤田保太郎様、三重村木弘様全石川一男様、高崎櫻井まよ様、國峯かく様、全三橋博子様、愛知水谷分きを様、大阪寺山房枝様、全大和清治郎様
- 壹圓五拾錢 桑名佐原眞様
- 貳圓宛 東京佐藤良知様、全佐藤助治様、清水藤下三策様、長岡市吉澤幸七様
- 參圓宛 鎌倉高徳院様、揖斐小林かゝる様 ○四圓五拾錢 和歌山市法蓮寺様 ○五圓宛 東京戸崎潔様、三重谷口年泰様、佐賀舟木まつ様、大垣大橋こゝろ様 ○六拾錢 岐阜高木茂一様 ○拾圓宛 愛知中野俊一様名古屋高島康夫様 ○壹圓宛 名古屋加藤彌太郎様、高橋安吉様、水野秀治郎様、松尾乙市様、清水榮次様、久田宗太郎様

定價誌本	注文の注意
一部 金 十 銭 郵税共 半部 金 六 十 銭 全 一ヶ年 金 一 圓 全	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆講讀希望者は代金を添へて御申下さい</li> <li>◆誌代は總て前金御拂込の事</li> <li>◆送金は振替によるのが便利 です</li> </ul>

昭和六年二月十八日印刷納本  
昭和六年二月二十日發行  
東京市芝區芝公園十四號地九番  
發行兼 編輯人 土屋 觀 道  
名古屋市西區隅田町二番地  
印刷人 百々治之助  
電話四(五)二九三番  
名古屋市中區鍋屋町二丁目  
印刷所 名古屋山田活版印刷所  
電話東(四)三六五・七五五  
東京市芝區芝公園十四號地九番  
發行所 眞 生 社  
振替口座東京四七二八八番

(大正十四年八月十三日) 昭和六年二月十八日印刷納本 (毎月一回十二日發行)